

道内本を全国に

電子化活動10年

道内の出版社でつくる「北海道デジタル出版推進協会」（札幌市、代表理事・林下英二＝中西出版社長）が、発足から10年を迎えた。出版不況で地方の出版社が苦境に立たされるなか、道外の人が手にすることが難しかった本を電子化して全国に売る事業を開始。地道な活動が実を結び、電子化以外の活動にも乗り出している。

文化継承へ地元出版社タッグ



北海道にちなんだ本や雑誌を会員出版社自らが直接販売するイベント＝9月、札幌市、北海道デジタル出版推進協会提供

道内の出版社15社が集まって2013年6月に設立された。生き残りをかけて、電子化による全国への販路拡大をめざした。地域に根ざした地方発の出版物を絶やさないことで、北海道の文化や歴史を継承していくことが目的だ。

会員出版社は現在、14社。現在販売している電子化した会員出版社の書籍・雑誌は約1050点。電子図書館システムを導入している全国の公立・学校図書館のほか、キンドルストアなどの電子書店で一般向けに販売する。

当初は収益化できなかったが、売り上げはゆるやかに右肩



売れ筋の電子書籍、「慟哭の谷」（共同文化社）

上がりに伸び、コロナ禍では外出自粛を受けて電子図書館が全国で急速に普及したため、急激に売り上げが増えた。

史上最悪の被害とされた苫前町の三毛別ヒグマ事件を記録した「慟哭の谷」（木村盛武著、共同文化社）や、「伝統のアイヌ文様構成法によるアイヌ刺しゅう入門 子チリ編」（津田命子著、クルース）などが、図書館向けにも一般向けにもよく売れているという。

電子化することにより、今までは東京などの書店に並ぶことがなかった本が、道外の人の目にもとまるようになって、シリーズをリピート購入する例も。札幌・円山に住むおぼけが主人公の絵本「おぼけのマル」（けーたろう著、なかいれい・絵、中西出版）シリーズの場合、いくつもの作品が売れ筋上位に入っている。

電子化事業の収益で、それ以外の活動をする原資も捻出できるようになり、2021年か

コロナ下売り上げ急増 収益で催しも

「北海道デジタル絵本コンテスト」を開催。道内の自然や文化などの魅力を表現した子ども向けの創作絵本を募集する。入賞作は、道内各地の電子図書館に寄贈され公開される。札幌市電子図書館では、図書館のIDを持たなくても閲覧できるようにする。道内外を問わず多くの人に読んでもらい、北海道の良さを知ってもらうのが狙いだ。

今年も第3回となる北海道デジタル絵本コンテストの作品を募集中。入賞作は、条件が整えば一般向けの電子書籍として販売することも検討する。応募条件は道内在住の中学生以上。プロ、アマは問わない。最優秀賞には賞金10万円が贈られる。募集期間は1月15日まで。詳細は、協会ホームページで確認できる。

協会では、紙の本とデジタル双方の良さを踏まえてハイブリッドで、北海道の文化や歴史を発信していくことをめざしている。電子化事業が軌道に乗ったことで紙の本を販売するイベントなども開催できるようになった。協会理事の小菅千春さん（45）は、「電子化で、多くの人に北海道の文化や歴史、自然、人物などを知ってもらい、北海道の出版文化を活性化していきたい」と話す。

（佐藤亜季）